

## ドストエフスキーを読む会 報告 『白痴』

報告者 松浦洋さん

発表ではモチュリスキー「評伝ドストエフスキー」等の評論において『白痴』を扱った箇所、及び作品そのものが朗読された。発表者はあらかじめリハーサルを行い、朗読がちょうど1時間で終了することを確認したうえで発表に及んだとのこと。発表者によれば本作品のうち朗読に値するシーンは、① 第2編5章:ロゴージンがムイシュキンを刺そうとした瞬間にムイシュキンが癲癇の発作を起こした、② 第4編8章:ナスターシャ・フィリップヴナとアグラヤーの直接対決、③ 第4編11章:ナスターシャ・フィリップヴナの遺体の前で一夜を過ごすムイシュキンとロゴージン、であるという。今回は②を朗読した。

テキスト朗読の効果であろうか、発表後の議題はナスターシャ・フィリップヴナの問題に絞られた感があった。彼女が頻りに名前・父称で呼ばれるのは彼女が人々から真に敬われているというよりは敬遠されている存在であるからだ。私はこの人物を悪女とみており嫌悪感を持たずにはいられないのだが、今回はそれに対する反証とも言える意見があったので公正を期してそれを紹介したい。

まず、ナスターシャ・フィリップヴナは単に精神的に不安定になっていただけという意見が出た。確かにムイシュキンも彼女を精神異常者だと言っている。この意見を出した参加者によれば、彼女はアグラヤーにムイシュキンを譲る気でいたという。であるにも関わらず今回朗読のシーンにおいてナスターシャ・フィリップヴナがムイシュキンを手に入れる形になってしまったのは、アグラヤーのある意味鋭すぎる発言によってナスターシャ・フィリップヴナが逆上してしまったからか。ここで「ある意味」と書いたのは彼女が真の意味でナスターシャ・フィリップヴナを理解していなかったと考えられるからだ。

何故、ナスターシャ・フィリップヴナが精神的に不安定になっていたかについてはトーツキーから受けた性的被害による心的外傷が原因だという指摘があった。私は果たして本当に性的被害があったのだろうかかと疑っているのだが、今回はあったという前提で話を進める。『白痴』はいわゆる三角関係の物語として把握されることが多いが、その前にトーツキーとの件があり当人は早々に物語から姿を消してしまう。残されたナスターシャ・フィリップヴナ自身も周囲の登場人物たちも(ときには読者も)大元の問題を認知できないし、誰もナスターシャ・フィリップヴナに対して適切な対応ができなかった。読者はともかく登場人物たちにとってそれはやむを得ないことだ。物語の当時にはPTSD(心的外傷後ストレス障害)の概念もなかったし、フロイトさえいなかったのだから。現在においてもそうだが、世間の性的被害に対する理解の欠如も要因だろう。この指摘をした参加者からは現在のフェミニズム論者なら『白痴』をどう読むか知りたいという趣旨の発言もあった。ドストエフスキーの作品はリアリズム文学としてよくできているという趣旨か。ナスターシャ・フィリップヴナには実在のモデルがいるのだろうか?と私は考えた。

以上のように論点を絞った議論が行えたのは良いことであった。一方で、美しい人間を描くことが作者の創作意図であった、などの定番の話が出てこなかったことに戸惑いを感じた参加者もいた。そこで次回も『白痴』をやる運びとなった。